HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	日本正教会と北海道 ： 前史から函館のニコライへ
著者	桑原，俊一
引用	開発論集，85：197-211
発行日	2010-03-01

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第85号　197-211(2010年３月)

日本正教会と北海道
――前史から函館のニコライへ――

桑　原　俊　一*

はじめに

西暦2000年はキリスト教徒にとって記念すべき節目の年であった。幸い筆者は在外研修の機会を与えられ，エルサレムとローマで研修の時を過ごすことができた。巡礼者が各国から絶え間なくやって来る。観光スポットといわれる教会堂，博物館や美術館には長蛇の列ができる。エルサレムは保安上厳戒下にあったとはいえ，この年の９月末までは比較的平和であったといえる。エルサレムの旧市街には若い兵士たちの姿を辻のあちこちで目にすることはあっても，彼らの顔にはまだ余裕さえ残っていた。旧市街は大まかに４地区に分かれ,異なる宗教と民族が共存している。この地区のいわゆるキリスト教徒地区はギリシア正教徒がほぼ占有している。筆者は正教徒という宗派について知ってはいたものの経験的にその実像に迫ることはいまだなかった。

旧市街の西側はモダンで瀟洒な商店街が軒を連ねている。筆者はヒブル大学のアッシリア学の教授のもとで研修を続けていたが，宿泊していたカトリック修道院はこの界隈の施設の一つである。徒歩で旧市街まで15分ほどの距離である。何度この旧市街を巡り歩いたことか。本稿で取り扱う課題はこの時期に受けた刺激の一つを源泉にしている。

食料品の調達は近くのスーパーマーケットで済ませるが，散髪は旧市街にある理髪店に通なければならなかった。この理髪店は新門を入るとすぐ近く左手にあって，鄙びた硬い椅子が一つ，理髪師ももちろん一人である。新門はキリスト教徒地区にあって，ギリシア正教の顎鬚を長く伸ばし黒い衣服を身に纏う司祭たちをよく見かける。ここで受けた刺激の一つはイコン（聖像）の存在である。正教会の会堂の周りにはイコンを売る土産屋が所狭しと並んでいる。イコンは大小様々である。鮮やかな色彩でイエスや聖家族さらに守護聖人たちが描かれている。この時まだイコンに秘められた意味の深淵を得ることはできなかったし，そもそも正教会について十分な認識さえなかったのである。それにもかかわらず，イコンとの出会いは忘れえぬ経験として残り続けていた。

本稿は上述したエルサレムの経験と北海道における日本ハリストス正教会（以後正教会と略記する）の存在に触発された論考である。布教の過程で実質的に，一時期の不幸な時代を除けば，ロシア正教会が日本伝道を導いたといってよいし，その起点が函館であったこ

*（くわばら　としかず）開発研究所研究員，北海学園大学人文学部教授

とを考慮すると，日本正教会と北海道との関係は取り組むべき課題を多とする。本稿はとりわけ黎明期から函館を起点とする正教会活動の歴史を回顧し，幕末から維新の激動期に正教（ここではロシア正教）へ改宗していった沢辺琢磨らの文化受容を考察対象とする。

1．北海道教会小史

一般的に日本正教会や東方教会の歴史や文化について紹介している出版物は多いとはいえない。日本ではキリスト教といえばせいぜい旧教や新教，つまりカトリック[1]とプロテスタント，に区分されるぐらいでる。確かに現在世界のキリスト教人口で比較した場合カトリックは19億を超えるのに対し，正教徒の数は2億程度と低い[2]。日本においてもしかりカトリック人口は45万人であるが日本正教徒は1万人ほどにとどまっている。それに比べると英国教会は6万5000人ほどで認知度は高いといえる。信徒数だけでいえばエホバの証人となると20万人にも達する。しかし北海道キリスト教史の黎明期を検討するとき，正教会の活動は際立っている。ローマに発するキリスト教カトリックは南回りで1550（天文19）長崎に上陸するが，一方東方正教会は北回りでロシアを経由し北海道で布教を開始する。両者は17世紀初頭函館の地で交わることになる。従って北海道の歴史と宗教を検討課題として取り上げる場合，正教を考察対象とするに十分な根拠はあると思われる。手短に北海道キリスト教史を概観しておきたい。北海道にキリスト教会がその足跡を刻む時代は福島恒雄によれば以下のように区分される[3]。

第1期　前史　1618年－1857年
第2期　開始史　1858年－1885年
第3期　教会形成期　1886年－1911年
第4期　協力伝道期　1901年－1933年
第5期　苦難期　1931年－1945年

[1] 6世紀になるとキリスト教ローマ帝国の西側は東から切り離されていく。8世紀にはローマの総司教が中心になり所謂ヨーロッパが形成されていくことになる。それにより東地中海を中心にひとつの文化圏を構成していたビサンティン帝国の文化は東西に分断されることになった。8から13世紀までの間に西にイタリア，北アフリカと北方ゲルマンの諸文化は交流と受容によってひとつになっていく，一方，東ではバルカン半島の国々とロシアはビサンティン帝国の文化，つまり正教文化を継承していくのである。

[2] 世界の宗教人口ランキング（統計は多少古いように思われるが今日の数字とさほど違わないと思われる。）

順位	宗教名	人口
1	カトリック（キリスト教）	10億4000万
2	イスラム教・スンニ派	9億5200万
3	ヒンドゥー教	7億4700万
4	儒教・道教	3億6900万
5	プロテスタント（キリスト教）	3億6100万
6	東方正教（キリスト教）	2億2300万
7	大乗仏教（仏教）	1億9800万
8	イスラム教・シーア派	1億8400万
9	上座部仏教	1億3400万
10	英国教会派（キリスト教）	5500万
11	シーク教	2300万
12	チベット仏教	2100万
13	ユダヤ教	1500万
14	イスラム教・ワッハーブ派	1100万

キリスト教合計　19億6700万人　イスラム教合計　11億4700万人
仏教合計　3億5300万人　1997年調べ
http://www.hyou.net/sa/jinkou.htm　2009年12月13日取得。

[3] 福島恒雄『北海道キリスト教史』日本基督教出版局，2003年，16頁を参照。

第6期　戦後発展期　1946年－

ただし本稿の対象はキリスト教会通史を展開することではない。主としてカトリック(切支丹）と正教，なかんずく正教を射程に所与の課題を検証することである。従って他のキリスト教諸派につては必要と思われるできごとに言及するに留める。

第1期は函館[4]に渡ってきた切支丹やハリストス正教会の千島伝道に見られる。

第2期はハリストス正教会のイオアン・マーホフ司祭が函館領事館に着任した年で，カトリック教会ではジラール神父が函館に宣教師を派遣した年（1858（安政5）年）を開始期とすべきであろう。プロテスタントの伝道はM.C.ハリス（メソジスト）や，W.デニング（聖公会）に始まるといってよい。

第3期は諸教会の組織が形成される時期である。1886年日本組合基督教会，1886年には日本聖公会，さらに1890年に日本基督教会が次々と教会を設立していく。カトリック教会は函館司教区を置いた。

第4期は各教派が協力して伝道が盛んに行われた。

第5期は苦難に満ちた時代であった。満州事変，支那事変，そして太平洋戦争と多難な戦時下に置かれた。戦時体下にあって強制的協力を強いられ，宗教団体法の下に困難な歴史を経験したのである。1941年には宣教師の強制退去，1942年の聖公会やホーリネス教団への弾圧，さらには反戦容疑で拘留や逮捕に至る牧師たちも出た。

第6期は戦後になるが，平和憲法や信教の自由が保障され，各会派の伝道が盛んになるにいたった[5]。

2．黎明期のカトリック教会と正教会

正教会の歴史はまさに黎明期においてその特徴を俯瞰することができる。前史は津軽に流された切支丹が迫害をのがれて松前に渡ってきた年に始まる[6]。ハリストス正教会のイオ

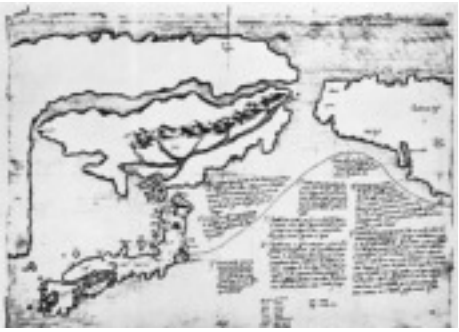
[4] 1869(明治2年)まで函館は箱舘と綴られていた。改名については8月説と9月説がある。とはいえ，明治4年頃まで開拓使出張所が函館出張開拓使庁と改名されたにもかかわらず「ハコ」の字の混用が認められる。明治5年になると「函」の字に統一された。

[5] 福島恒雄『北海道キリスト教史』，16-18頁を参照。

[6] 福島恒雄は第1期前史を1618年と取るが，北海道では1614(慶長19)年のイエズス会年報によれば蝦夷島で5人洗礼を授けたとあり，これが蝦夷地におけるキリシタンの最初と見てよかろう。1618年にはアンジェリスが，そして1620年にはカルワーリュ神父が来道して布教活動を行なった。松前藩は当初キリシタンには寛容であった。その理由は金山で労働するものたちに税金をかけていたためだといわれている。つまり，金山の人口が増えればそれにつれて金が採掘され藩の税収が上がる仕組みになっていた。1612（慶長17）年に徳川幕府はキリシタン迫害を始め，1614（慶長19）年には全国的なキリシタンの禁教令を発布し外国人宣教師の国外退去を命じた。1637年に島原の乱が起こると幕府は鎖国政策とのキリシタンに対する迫害を強化していく。これを受けて，全国のキリシタンが幕府の迫害をさけて東北，蝦夷地へと向かい，特に松前の千軒金山に流れて行った。幕府の徹底的な弾圧を始め，圧力が強まったために松前藩でもキリシタンを駆逐せざるをえなくなり，1639(寛永16)年には大沢金山で50名，千軒金山で50名，上ノ国石崎へ逃れた6名の合計106名を松前藩が処刑するという事件が起こった。殉教に関する文献（福島の恒雄『北海道キリスト教史』62-66頁参照；松前町史編集室『松前町史』通説編第1巻，松前町，916-929頁参照。）はいまだ十分とは言えないが，この史実を後世に残すために1960年にカトリック信者により大千軒岳金山番所跡に十字架が建てられ，毎年夏に殉教者のミサが現地で行われている。

アサフ修道司祭の千島伝道が開始された[7]。千島からロシア本国に渡りロシア正教徒となった事情は大変興味深い。つまり日本人最初の正教徒は誰かということだ。ロシア側の資料によれば，最初の日本人はデンベイ（伝兵衛）という名で大坂の商人だといわれている。1659年に米や木材などを船に積んで江戸に向かっていたが台風にあって漂流し，カムチャツカに上陸した。ついにはロシア本土サント・ペテルベルグに連行され1702年にピョートル大帝と謁見して日本のことを伝えた。大帝の命令を受け日本語教師をしながら過ごし，本国への帰国を願い出たが許されなかったという。ついには洗礼を命じられガウリールの聖名で受洗したそうだ。デンベイが提出したという日本の宗教に関する叙述は要領をえたものであった。「…日本人の宗教は，支那人と同様で金，銀，銅，鉄および木製の偶像がさまざまあって，これを崇拝している。…天地創造者である神について訊ねられた―日本人は神を信仰するか，神はどこで懺悔を受けられるか―デンベイは次のように答えた。天地創造の神は，１年は地上に，１年は天に住まわれるが，人々はその姿を拝んだことはない。その崇拝する神々を，人々はさまざまな名で呼んでいる。…」日本人最初の正教徒たちは漂流民としてロシアで洗礼を受けた者たちであった。ただ漂流民が全てロシアに辿り着いたわけではなかったし，漂着できても殺害された者も多かったのである。デンベイ以降の日本人で正教徒になった有名な大黒屋光太夫らの記録文書は大変興味深いが，彼らのその後の経緯や歴史については，牛丸康夫『日本正教会史』が詳しい[8]。この時期のロシアで正教徒になった漂流民日本人は過酷な環境下に置かれ，異文化に適応するために生きる手段として正教徒になったものが多かった。もちろんそうした日本人正教徒の中にもロシア正教に帰依し篤信な信徒になった者たちもいた。他方，大黒屋光太夫のように漂流民でありながらも教養人・文化人であっ

当時のイエズス会は蝦夷地に対する宣教の可能性に鑑み，ローマ・イエズス会に蝦夷地の地理情報を報告している。その中に大胆なデフォルメが施された地図が含まれていて，切支丹禁教令のなか蝦夷地が宣教の地として巨大に描かれている。



蝦夷国地図（ローマ・イエズス会本部所蔵）

中央部にほぼ本州と同程度に蝦夷地を大きく配し，その周囲にロシア・中国・韓国・アメリカを置いている。蝦夷地図には千軒岳が描かれている。H.チースリク編『北方探検記』元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書，吉川弘文館，昭37年；永田富智『えぞキリシタン』講談社，昭和47年；秋月俊幸『日本の北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会，1999年；松前町史編集室『松前町史』921頁を参照せよ。

[7] 1747年にカムチャツカの掌院ホコウンチェウスキー師がイオアサフ司祭を千島に派遣し，アイヌの伝道に当たらせた。彼はのち1794年にはシノド（聖務会員）からアラスカ正教団の責任者として派遣された。イオアサフ主教はロシア時代のアラスカの初代主教となったが，皮肉にも現在はアメリカ正教会の初代主教とされている。釧路正教会百年史委員会『釧路正教会百年の歩み』釧路ハリストス正教会，平成4年，6-7頁参照。

[8] 日本ハリストス正教会教団府主教庁，平成5年，3-9頁を参照。

た者は異文化への適応は困難だったようである[9]。この時期にはまだ日本国籍の正教会員はクルリ人であった。漂流民は自ら意図してロシアに渡った者ではなかったにしろ鎖国状態におかれ，外国の情報を得ることは極めて限定的であったこと考慮すると，異文化への対応がいかに困難であったか理解できよう。

3．正教函館へ

19 世紀中頃は西欧列強が幕府に開国を迫っていた時期である。1853（嘉永 5 ）年米使節ペリーが艦隊を率いて浦賀に入港した。ロシア使節プチャーチンは長崎に入港している。翌 1854（安政 1 ）年にはペリーは再び浦賀に来航し日米和親条約を結んだ。同年日英和親条約も締結された。そして 1855(安政 2) 年には日露和親条約の締結に至る。1858（安政 5 ）年日米修好通商条約を調印，以後オランダ，ロシア，イギリス，フランスと次々に修好条約を調印する。こうして函館は貿易港として国際的関係を担うようになった。1859（安政 6 ）年，幕府は横浜，長崎，函館の開港を命じ，函館は 6 月 2 日に外国貿易港となる。当時江戸には公使館はなかったので，日露全ての外交事務は函館の領事がその任に当たっていた。

函館港に 1858(安政 5)年 11 月 5 日午前 10 時ロシア外交官イオシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチ一行が入港した。この中に領事と共に正教会の領事館付属聖堂の主任司祭イオアン・マーホフと誦経[10] 書記のオワンデールが随行していた。北海道キリスト教史における第 2 期，つまり本格的なキリスト教布教の開始は，正教会のマーホフが修道祭司として函館に着任した年，1859（安政 6 ）年で，同年，カトリック教会ではフランス総領事の通訳兼領事館付司祭としてジラール神父[11] が品川に来航する。同年ジラール司祭は函館にメルメ・ド・カション[12] を宣教師として派遣した。

ロシア函館領事館は日蓮宗の寺院である実行寺（じっこうじ）が与えられた。領事とその家族は境内にある建物を宿舎とし，単身館員は停泊中の軍艦から通勤したそうである。1859 年には現在

[9] 同書，8-9 頁参照。本論からいささ外れるが，筆者はかつて米国に長期滞在（19710 年代から 1990 年代）した経験があり，当時の日系アメリカ人にも並行する宗教現象を証言する者たちに出会った。いわゆる日系 1 世たちは一旗あげて日本に帰る夢を追って渡米した。太平戦争に遭遇し，帰国が叶わなかった者の中には既に仏教会はあったが，米国に忠誠を表明するためキリスト教徒に改宗した者たちも多かった。しかし彼らの中から日系キリスト教会の礎を築く指導者が育っていった。

[10] 誦経（しょうけい）は正教用語で，祈祷文を詠むことをいう。誦経行為は誦経者によって行われる。正教の典礼は誦経を伴う。つまり音読するのではなく，一定の音程を保ちながら歌うように読むことで祈祷全体を維持する。聖職者や詠隊(聖歌隊)と一体となって奉神礼を執り行う。奉神礼につては本稿 11 頁以下を参照せよ。

[11] 1858 年日仏修好条約の締結後，香港を経由して品川に入る。1862 年横浜居留地 80 番に教会堂清心聖堂を落成するも，横浜天主堂事件を惹き起したとして，一時帰国し，翌年横浜に戻る。横浜天主堂事件とは天主堂を見物に来た者たちが逮捕されたことをいう。いまだ切支丹禁制下にあったこともあり 50 名余の見物人が逮捕され牢獄に監禁されたといわれている。事件の詳細と経緯については『清心聖堂百二十年史』1982 年等を参照せよ。

[12] 当初中国南部で布教活動に従事した。その後，那覇に渡り日本語を学び，通訳官として来日する。函館で仮堂（天主堂）を建て布教に当たる傍ら仏語塾を開いた。1865 年には横浜に仏語伝習所を設立する。『アイヌ民族』や『仏英和事典』を著わした。

の高台にある函館正教会（聖堂）の敷地に領事館の建物が建設されていった[13]。聖堂はロシア正教独特の玉葱型環状構造（オニオンドーム）で，鐘楼の鐘の音からガンガン寺ともいわれた。この聖堂をもつ函館は日本正教会発祥の地となった[14]。修道司祭ワシリイ・マーホフとイオアン・マーホフ[15]は1860（延元１）年に病弱等を理由に日本を離れた。その後任として来日したのがイオアン・ディミトロヴィチ・カサートキン，後の修道士ニコライ[16]で1861（文久１）年に函館のロシア領事館付祭司として着任した。その函館はその前年外国商船が30隻，軍艦がロシアを主として13隻，捕鯨船21隻の入港があって，戸数2500，人口11000人の港町であった[17]。開港と時を同じくして，諸術調所（しょじゅつしらべしょ）[18]等の機関が開設され，ここでは幕吏や藩士を問うことなく入学許可出され，身分に分けへだてなく能力に応じて教育を施したことから全国から勉学意欲に燃えた青年学徒が集まっていた。洋学所も整備されていくことになる。オランダ語

[13] 安政６（1859）末年　四月貸渡
一，合坪　二千坪
一ヶ年地税　洋銀二百四十弗　上大工町　魯領事
が居留地として与えられた。
ちなみに他の１例をあげると，
一，合坪　三百五坪二合八才
一ヶ年地税　洋銀百九弗九十一セント四　大町築島　英商人　ブレキストン
如何にロシア領事館の居留地が広かったかが理解できよう。函館市『函館市史』通説編，第１巻，昭和55年，597頁を参照。

[14] 残念ながら函館正教会史は出版されていない。その大きな理由は1907（明治40）年の函館大火によって資料の大半を失ってしまったことによると思われる。長縄光男『ニコライ堂遺聞』成文社，2007年，57-106頁を参照せよ。厨川勇（1961－1980年まで函館ハリストス正教会管轄司祭）による『函館ガンガン寺物語』（北海道新聞社，1994年）も参考となる。物語風ではあるが函館正教会の歩みと街並みや風物を伝える貴重な書物である。2009年函館市は開港150年を記念して市史を編纂中とのこと函館正教会についても仔細な教会史資料の発掘が期待される。

[15] イオアン・マーホフの女婿にワシリー・マーホフなる人物がいる。彼は神学校卒業後修道士となり，修道僧となるも，まもなく陸海軍々隊付司祭となる。世界就航の旅の途中様々な運命的出来事に出会う。下田港では地震のため難破。帰国後1858年に函館領事館付き司祭に任命されている。なお，この難破に絡んで日露文化交流に貢献した橘耕斎の数奇な人生が付随するがこれについては札幌正教会百年史委員会『札幌正教百年史』昭和62年，6-8頁を参照；厨川勇『函館ガンガン寺物語』18-19頁等。

[16] ニコライの生い立ちについては本稿の主題ではないので他に譲るとしても，日本正教史を考察する場合，避けて通ることのできない聖人であって，本稿の検討課題にとっても密接な関係を認識しなければならない。現代の日本正教会にあっていかに大きな存在であるかは出版されている各地に建立された教会史を見れば明白である。参考文献として高橋保行『聖ニコライ大主教―日本の礎―』日本キリスト教団出版局，2004年と中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波新書，1996年を挙げておく。前者には巻末に参考文献他参考資料が載せてある。またニコライの年表が付されている。ニコライは1906年大主教に昇叙された。その後日本正教会は20世紀後半になると世界の正教会のひとつとして承認されニコライは聖人に列聖され「聖ニコライ」となる。正教会の暦にはカトリック同様諸聖人の名が記載されている。２月16日は聖ニコライの日で，「日本の光照者，亜使徒，聖ニコライ大主教」とある。本稿は函館における司祭ニコライの時代に限定しているため司祭ニコライ，多くは単にニコライとした。

[17] 札幌正教会百年史委員会『札幌正教百年史』12頁を参照。荒居英次『近世海産物貿易史の研究』吉川弘文館，昭和50年よるとアメリカ船10隻，イギリス船９隻（1859安政６年），1862（万延１）年以降は国別入港商船別では米英両国の商船が主たるものになる。函館市『函館市史』613-614頁を参照。

[18] 1856（安政３）年洋学諸学問の研究と教育のために創設した。蘭学はもとより，蝦夷地や樺太の巡回巡察を行ったりした。入港の外国船から艦船の製造，砲台の築造法を学ぶ。器具製造，金属分析法等の研究をした。

はもとより，開港に伴い英語とフランス語も教授された[19]。函館は幕府の直轄地でありながら何れの城下町にも属さなかったことから自由と開放の精神が満ち溢れていた。主に東北からの出身者が集結してきた。さらに具体的に言うならば，この時期，幕府は太平洋岸の警備を，日高以東を仙台藩に，そして胆振以西を南部藩に委ねていた。そのために両藩を主として武士たちと彼らの取り巻き等が函館に集まってきていた。つまり函館は彼らの生活物資の補給基地としての役割を担っていたのである。24歳の青年宣教師ニコライにとって格好の地であったといえよう。日本語の習得や文化を吸収することが必須と心得ていた彼にとって函館はまたとない出発点であったのである。とはいえ函館は多様な価値観を持つ人々が交差するところでもあった[20]。

4．ニコライと最初の洗礼者

ニコライの函館滞在は8年であるが，決して長かったわけではない。しかしながらこの滞在中のニコライと若き青年たちの邂逅は正教が日本に根付く端緒となったことだけは確かである。函館は今日と異なり，多数の下級武士・浪人をはじめ，医師，実業家や工芸家などが集結する活気に満ちた都市であった。ニコライから領洗[21]を受け正教徒となっていった者の中に日本人最初の司祭になった者たちも含まれていた。時代はまさに転換期を迎えており，混乱の最中であって，キリスト教布教の観点からいえば迫害と弾圧の厳しい時代でもあったのである。そうしたなかでニコライから領洗を受けた。領洗にいたる諸状況について少し説明する必要があろう。尊王攘夷論者であり，神明社の神官としてすっかり街の名士になっていた沢辺がこともあろうに正教徒（ハリステアニン）になったとあっては，浪士の仲間たちからさえ狂気の沙汰と映ったのも故なきことではなかった。最も心配したのは妻であったことはいうまでもない。明治維新となり函館奉行も新任奉行となり，切支丹迫害の噂が流布し始めると，沢辺の友人鈴木富治は必死になってしばらく函館を離れ，身を隠すよう説得する。幕末の乱世を生きた彼にとって一度函館を離れることが何を意味していたかは十分理解していた。イ

[19] 函館奉所は運上所内に「稽古所」を設け，この機関は「教学所」とも呼ばれ，後には「函館洋学所」となる。いわゆる学問を教授するというよりは専ら通訳養成がその目的であった。とりわけ当時の函館は英語教育が必要であった。

[20] 1960（万延1）年桜田門外の変が起こり，井伊大老が攘夷党によって殺害され，徳川幕府は末期を迎えて混沌とした時代であり，函館もこうした時代を映す鏡でもあったのである。加えてニコライが函館に着任した当時はいまだ切支丹禁制下にあったため，自由な布教活動は許されるべくもなく，この時代のニコライは日本研究に没頭した。日本語の教師として秋田大館から木村謙斉を招き，日本語のみならず，儒教，仏教，神道など広く東洋学を学んだ。一時，木村謙斉が藩兵の軍医として北海道に渡るが，後函館で医院を開業すると彼の私塾に足繁く通い「易」についてさえ議論したという。その後7年をかけ『古事記』，『日本書紀』などを読破するとともに，仏教については僧侶に学んだ。しかる後，正教会に関係する経書，奉神礼書の一部の翻訳を始めた。日本における布教のため14条項からなる『伝道規則』を制定した。牛丸康夫『日本正教会史』34-35頁を参照。

[21] 正教でよく使われる洗礼ないし受洗のことで，近年は正教においても洗礼が使用されている。正教は固有の用語を使用することが多いため正教徒でなければ理解できないこともしばしばである。ただ近年は一般的な用語を用いる傾向がある。本稿では正教の固有性を重視する観点から敢えて正教で使用されている用語を用いた。

イスス・ハリストス[22]の伝道者として生きること，何処にあっても命を賭した逃避行になることは彼自身が一番良く知っていたのである。1868（明治１）年ついにニコライに領洗を申し出ることになる。沢辺を含む３人の若者が領洗を受けた。一人は沢辺琢磨の友人で宮城県出身の医者であったイオアン酒井篤禮である。彼の父もまた酒井順庵といって人望のある医者であったが，後に彼は司祭[23]となる。イアコフ浦野大蔵[24]は岩手県宮古出身の実業家である。

３人目のパウェル沢辺琢磨については多くのことが語られよう[25]。なぜなら彼こそ激動の時代に翻弄されながらもニコライとの邂逅によって，武士から正教の司祭になったからである。沢辺琢磨は幼名を山本数馬といって土佐藩の下級武士であった。琢磨と坂本龍馬は従兄弟同士ということになる。琢磨の母は武市半平の妻の叔母にあたる。江戸に上り，千葉周作の道場で剣術修行をしていた。その後，江戸に出ていた武市半平太の鏡心明智流，桃井道場で師範代を務めるまでになるのだが，ある事件をきっかけに運命の針は大きく始動する。1857（安政４）年のある夜のことであった。塾生と外出したのだが，その人は大変酒癖が悪かったようで，その夜も一人の商人に暴力を振るい，商人は持っていたふろしき包みを放り出して逃げていった。ふろしきの中には小箱があり，二つの懐中時計が入っていた。数日後，二人は相談の結果それを売って酒代にしようとする。琢磨はそれを手にして浅草の古道具屋に出向くと道具屋は住所氏名を書くよう促す。琢磨はすっかり商談成立とばかりに道具屋のいうがままにするのだが，被害にあった商人はすでに手を回していたので，商人は道具屋からの通報を受けるとすくさま土佐藩に告訴したのである。いわば強盗事件である。ことは重大で琢磨は切腹を覚悟したくらいであった。武市は龍馬らと相談し，商人宅を訪れ時計を返し，事件は一件落着した。龍馬に勧められたと伝えられているが，琢磨は江戸を離れることになる。東北各地を転々としながら，新潟に現れ，そこで出会った前島密に函館行きを勧められ

[22] イエス・キリストのこと。ギリシア語からロシア正教会を経て日本語に音訳された。日本正教会の聖書に出てくる固有名詞はほぼ同様な経緯をもつ。従って一般的に知られている聖書由来の固有名詞であったとしても，はしばしば正教徒あるいはロシア語に精通しているものでなければ判明できない場合がある。

[23] 日本正教会の聖職者の位階制はロシア正教会のそれに倣っている。主教職，司祭職，補祭職の順である。主教職には妻帯を許されない総主教，府主教，大主教，主教がある。祭司職には，掌院，典院，修道司祭(妻帯が許されない)，首司祭と妻帯を許される長司祭とがある。補祭職には首補祭と長補祭がある。司祭は一階級上の主教によって叙聖（叙任）されることになっていて，1875（明治８）年当時のニコライは司祭職の掌院であったため自ら司祭の叙聖はできなかった。パウェル沢辺琢磨をもって日本人司祭の嚆矢となり叙聖されるが，そのためカムチャツカの主教パウェルが函館に赴かざるを得なかった。同時にイオアン酒井篤禮は補祭に叙聖された。ニコライ（中村健之介訳編）『明治の日本ハリストス正教会』―ニコライの報告書―，教文官，1993 年，訳者注(1)113-114 頁を参照。

[24] 彼のその後については良く知られていなかったが，彼が布教に向かった岩手県宮古で医院を開き，やがて曹洞宗に改宗し 1926（大正５）年に没していたことが分かった。
同上，114 頁を参照。

[25] 沢辺琢磨については福永久寿衛『沢辺琢磨の生涯』沢辺琢磨伝刊行会，1979 年を参照せよ。牛丸康夫『日本正教史』36-45 頁を参照。「北の龍馬たち④」『朝日新聞』2010 年１月５日朝刊，28 面に沢辺琢磨が取り上げられた。父親と龍馬がいとこ同士とあるが，琢磨と龍馬がいとこ同士である。

る。剣術がきっかけとなり道場を開くまでになる。そんな中で，函館神明社（現・山上大神宮）の宮司，沢辺悌之助の婿養子となり，性と神主職を継ぐことになった。

琢磨はすでに領事ゴシケーヴィチの時代から息子や館員などに剣術を教授していた。尊王攘夷主義者の武士であり宮司である沢辺は，着任したばかりの堂々とした体格のニコライに嫌悪感さえ覚え彼を殺害しようと目論んでいた。ある日，琢磨はニコライの部屋に侵入し「即時帰国せよ，肯んじないときは刀の錆にする。」といったと伝えられている。時々領事館に出入りしたこともあり，ニコライとの問答が始まる。それは「邪教」をめぐって交わされた。やがて琢磨はハリストス正教の理解者になる。琢磨の改宗にいたる論争エピーイソードが残されている。少々長くなるが，引用しよう。

（琢磨）なんじら異国人はわれらの国をうかがいに来ている。汝らの宗教はその道具だ。

（ニコライ）あなたはわたしどもの宗教の何であるかを知っておりますか。

（琢磨）それは知らない。けれども余の考えていることは，広く一般の意見である。

（ニコライ）わたしどもの宗教を知らないで，どうしてさように言わるるか。これは道理にあっておりますか。

（琢磨）しからば，なんじらの宗教は何であるか。

（ニコライ）ではお聞きなさい。

そこでニコライは唯一の神，世界の造物主のことを説明しはじめた。すると話がすすむにしたがって琢磨の顔はしだいにやわらいで，聞きながら腰から墨汁を取り出し，たもとから紙を出して，ニコライの言うところを記しはじめた。さらに琢磨は，

（琢磨）これはわたしが考えていたこととは違う。今後もまたわたしに教えのことをはなしてくだい。

（ニコライ）いつでもおいでください。話してあげましょう。

それからのち，彼はたびたびニコライを訪れ，まもなく熱心な信徒となったと，ニコライは言った[26]。

このようなニコライと沢辺琢磨に纏わる興味深い逸話はこの他にも数多く残されている。宮司であり，武士であり，かつ家族持ちであった沢辺がキリスト教に改心するとあっては，その行く手に大きな困難が待ち受けていたのも当然の成り行きであった。

1864（元治１）年に沢辺琢磨は函館にきてニコライのところに寄宿中の新島襄[27]と奇遇する。当時の宮司沢辺琢磨は熱心な尊王主義者で，鎖国攘夷論者であって函館に外国人が多数往来することにも快く思っていなかった。そればかりか領事館の焼き払いやら外国

[26] この逸話は 1879（明治 40）年，そのときは大主教となっていたニコライが補佐として来日したアンドロニク主教の歓迎パーティの席で話されたもので，最初に日本人正教徒となった沢辺琢磨との対話を紹介したものである。牛丸康夫『日本正教史』36-37 頁より引用。

[27] 群馬県安中藩士の出身で，蘭学などを学ぶうちに西欧諸国に興味を持ち，函館に学び，国外脱出を計った。アメリカに渡り，キリスト教徒となる。日本組合基督教会の創立の一人で，京都に同志社を建てて，キリスト教教育事業の基礎を築いた。新島は函館入りの当初，武田塾に遊学するつもりであったが，おりしも知人がおらず，菅沼精一郎という武田塾塾頭の紹介でニコライのもとに寄宿することになった。後彼のアメリカ渡航に手助けをしたのが沢辺琢磨である。

人殺害の密議のかどで奉行所に呼び出されたといわれている。一方，新島は早くから国外脱出を念願して函館でニコライの日本語教師となった。やがて両者は異なる道を通ることになるのだが，ニコライという接点を持つことを共有し，プロテスタントと正教いうキリスト教の指導者となっていくのである。沢辺琢磨は幕府の厳重な禁制を犯してまでも，新島襄の志に共感し新島の海外脱出を幇助することになる。

その後，琢磨は司祭となり，東北伝道に尽力した。長男も司祭となった。

5．沢辺琢磨たちと聖教会の典礼[28]

正教はなぜ広まったのか。この問いは，なぜ沢辺たちは正教徒に改宗していったのか，と言い換えることができよう。おおよそ沢辺琢磨らが外国人，とりわけここではロシア人に対する態度は上述したように敵意に満ちたものであった。それにもかかわらず何が彼らを魅了し改宗にまで至らしめたのだろうか。何が彼らをして正教徒へと駆り立てたのだろうか。宣教師ニコライの偉大さ，人間的魅力が彼らを正教へと導いたのは確かな一因であろう。如何に彼らにとってニコライが特別な存在であったかは，沢辺とニコライに関するエピーイソードや諸資料から読み解けるが，その他に彼らを引きつけてやまなかった要因はなかったのだろうか。困難な課題であったとしても検討しなければならない。本稿の中心的検証作業はむしろこの点を明らかにすることにある。

この課題については既にいくつかの提案がなされている。D.M. ボズニェーエフがその一つを紹介している[29]。この説はニコライの函館在住の時期に基礎をもつものである。時は徳川幕府に忠誠を尽くす者たちと天皇の政府とのあいだの確執と戦乱であった。ニコライを通して正教を受け入れていったのは明治政府に対する幕府の戦いのため，宗教を介してロシアに支援を取り付けようとした。ニコライの改宗者が東北地方に集中しているのもそのためだとする。しかし彼の見解によれば，この説明は説得力を持たないという。なぜなら日本人が徳川を擁護したいと思ったとしても，ロシアに憎悪をもつ者にはロシアとの連合はありえないからであるという。正教に帰依していった者は政治からは縁遠い人々で，むしろ裕福な知識人や貴族ではなく，貧しい階級の人たちに拡大していった[30]。

D.M. ボズニェーエフはニコライ自身による見解をもって正教拡大の理由を述べている。ニコライの論文は 1869（明治 2 ）年に書かれたもので，それによれば如何に正教がカトリックやプロテスタントスタントに比べ人的にも資金的にも劣っているにもかかわらず信徒数においてカトリック等を合わせても 2 倍に達しているとある[31]。ニコライはキリス

[28] 教派により祈祷・儀礼の用語は異なる。正教会の奉神礼はカトリック教会の典礼に対応し，聖公会やプロテスタント教会の礼拝に対応する。

[29] D.M. ボズニェーエフ（中村健之介訳）『明治日本とニコライ大主教』講談社，昭和 61 年，34-35 頁を参照。

[30] 同上，同頁。中村健之介による脚注 26，27 の『日本正教伝道誌』に基づく仔細にわたる解説が参考になる。203-207 頁参照。

[31] 同上，脚注 29 と 30 を参照せよ。当時のロシアの知識人にとって日本の宗教は原始的宗教現象と

ト教受容の時を迎え，知的・倫理的文化の最終的完成をなすものと位置付けている日本の既存の宗教，神道や仏教は結局のところ日本人を満足させることはできず，正教拡大の理由は，キリスト教を受け入れる準備が整ったことをあげる。ここにはキリスト教を高次の宗教と位置付ける西洋人の限界があるように思われる。なぜ正教がカトリックやプロテストに比べ信徒数の拡大を見たのか。その理由は他に求められるように思われる。

筆者は作業仮説として聖教の奉神礼（ほうしんれい）（典礼）を上げることができるのではないかと考える。なぜなら正教を正教たらしめているものは思想・神学というよりは礼典の只中にその真髄を現すからである[32]。正教会の奉神礼は独特の形式を持つ。既に指摘したとおり，正教は日本においてキリスト教の教派としては十分知られているとはいい難い。ましてや正教で用いられる祈祷・儀礼に関する用語は一般的・日常的範囲を超えるものも多く難解である[33]。

奉神礼とはギリシア語 leitourgia（リトルギア）の訳語で日本正教会における奉事・祈祷の総称である。正教徒として生きることは奉神礼に生きることでもある。筆者は奉神礼の体験にあずかるべく各地のハリストス教会を訪ねて参会した。札幌ハリストス教会をはじめ，函館，釧路などの道内教会，東京のニコライ堂，横浜ハリストス教会などである。幸い訪ねた教会ではいずれも歓迎していただき，奉神礼について行き届いた説明を受けることができた。朝の奉神礼を終えると昼食や茶菓による交わりのときがもたれていた。神父（司祭）やハリステアニンたちと歓談を許された。司祭には正教について質問し，執事たちからは各教会の歴史と彼らの信仰について聞き取りを行うことができた。こうした体験と聞き取りをとおし，筆者にとって知られていなかったキリスト教，日本の正教がおぼろげながらその歴史と奉神礼の姿・形を現してくれたように思われる。そしてこの奉神礼の機密[34]を中心とする儀礼のなかに幕末から維新の時代を駆け抜けた沢辺琢磨たちが正教に魅せられ命をかけて改宗していった鍵があるのではないか，と気づかされたのである。

機密の一つである聖体礼儀―ミサや礼拝に当たる―とはいったいどんなものなのだろうか。その風景を鳥瞰しよう。会堂に入ると先ず無数と思われるほどの大小の蠟燭の光が神秘な輝きを放っている。生神女マリアや諸聖人のイコン（聖像）が掲げたられていて至聖所にある宝座を仕切るイコノシタシス（聖障）―祭壇とその他の部分を隔てる高い壁のようになっていて，何段にもイコンが配列され来

映っていた。しかしこうした意識や価値観はロシアばかりでなくギリシア・ローマの時代以降西欧人の固定した観念であった。

[32]「キリストの救いは，哲学でもなければ思想でもない。日々の生活のなかで復活して弟子たちのなかに現れたときにあらわになった永遠の命にあずかることである。その命は，抽象的概念でも，単に信じるものでもない。神がこの世に人となったことによって，この世のなかで現実に体験しうるものである。」高橋保行『知られていなかったキリスト教―正教の歴史と信仰―』教文館，1999 年，75-76 頁から引用。従っていわゆる神学はキリストの復活の福音を秘めた教会生活そのもの，祈祷・奉神礼そのものなのである。

[33] 同書，215-224 頁に正教用語の簡潔な解説があり，正教を知る上で便利である。

[34] ギリシア語ミステリオンの訳語，ラテン語のサクラメントとも言われる。正教では神の見えないミステリアスな恵みを見える形を通して自身が受けること，としている。

世とこの世の接点を意味している―がある[35]。会衆は蠟燭を手にして，十字を切り，燭台に蠟燭を灯す。小さな明かり取りがあるだけで，蠟燭のかすかな光の中で礼儀は執り行われていく。イコンは身の引き締まる思いを味わわせてくれる。イコノスタスはロシア正教ならではの優れた教会美術である。

王門はイコノスタスの中央に置かれる。会衆は奉神礼のあいだ2時間から3時間起立したままである。従ってカトリックやプロテスタント教会の会堂に見られる長椅子などの設置は見られない。聖職者（祭司）だけが王門から中に入ることが許されている。王門は奉神礼の間，何度か開かれる。このことは信仰深い者に天国が開かれていることを象徴的に表している。

奉神礼は儀式そのもので，壮麗さがその特徴といってもよい。日曜日のいわゆる聖体礼儀にあずかる奉神礼は長時間にわたる。手の込んだ複雑な儀礼で構成される。司祭が纏う儀礼用の祭袍（さいほう）は色彩が豊かで荘厳である。衣服のそれぞれの部分は特別な宗教的な意味をになう。主教も司祭も普段は黒い僧衣を身につけ黒い帽子を被るが，奉神礼となると祭司らは独特の祭服を着る。復活祭などの特別な祭りにおいてはさらに煌びやかで華麗な祭服を纏うことになる。

基本的に，女性はスカーフなどで頭を被い，男性は帽子を取る。正面にあるイコンにキスをして頭をつける。それから，蜜蠟色の蠟燭３本くらいをもって，火をつけ，イコンの横にある燭台に立てる。淡い黄色の蠟燭は細く，たいてい金色の丸い燭台に何十本も立てられている。誦経者が聖書を詠む。それに，正面のイコノスタスの向こうにいる司祭が応答する。司祭と誦経者の応答が続く中，鈴の音とともに振り香爐でお香を炊いて廻る。会堂の中のイコン１つ１つに振りかけるように，振り回しながら，狭い会堂の中を歩き廻り司祭は会堂を１周して，また至聖所へ向かう。詠隊の讃美が応答する。煌く金色の聖器，多様なイコン，白い壁に高い天井，厳かな讃美と聖書の朗詠，香爐の香り，蠟燭の揺らめきのなか，司祭が王門の奥の赤いビロードのカーテンを開ける。司祭は正面にハリストスのイコンを手にして現れる。会衆は何度も十字を切りながら深々と頭を下げる。そして，また，鈴のついた振り香爐を回しながら，司祭がイコノスタスの向こうから出てくる。中に入ると，黄金の王門を開ける。詠隊の讃美が流れる。赤い大きな聖書を頭上に頂いて，扉から出てくる。司祭と誦経者との朗詠が続く。詠隊の讃美が呼応する。葡萄酒とパンを聖神（聖霊）によって変化させる機密の執行が続く。朗々とした聖歌の讃美と天主経（主の祈り）を祈る。しかして聖体の葡萄酒とパンを受け，感謝の祈りと司祭の祝福で聖体礼儀は閉じら

[35] イコノスタスの中央に王門（天門ともいわれる），その右手に南門，左手に北門がある。王門には受胎告知のイコンと，その下に四福音書を記した4つのイコンが描かれ，その右側に主イイスス・ハリストス，左側に生神女マリアさらにその聖堂が記念して建てられた聖人のイコンが描かれる。イコノスタスは16世紀頃から五段の飾り付けが一般的となり，イコンの飾り方も一般的なしきたりはあるが，聖堂によって多少の差異はある。五段は，上から旧約聖書時代の族長たち，二段目が旧約聖書時代の予言者たち，三段目がこの世におけるハリストスの行跡や奇蹟をあらわすイコンが配置される。そして四段目はたいていイコノスタスの中核であり，中央にキリストの玉座像，左側には聖母マリアの立像，右側に授洗者イオアンの立像，その両側に十二使徒の立像が描かれる。

れる[36]。

奉神礼には祈祷儀礼の伝統が息づいている。晩課[37]とよばれる暮れの祈りにおける聖歌のひとつは次のようなことばである。

恩寵きたりて
法律の影はされり，
もゆる荊の焼けざりしごとく，
童貞女は生み後も永く童貞女なり。
炎の柱の代わりに
義（まこと）の日は出て光る。
モイセイの代わりに
我が霊の救者ハリストスはあらわれたり。生神女ドグマティク　第2調[38]

機密（サクラメント，秘蹟）には聖体礼儀のほかに，洗礼機密，痛悔（つうかい）機密，傅膏（ふこう）機密，神品（しんぴん）機密，婚配（こんぱい）機密，聖傅（せいふ）機密があるが，領洗をうけた者のみが参加できる。これらの機密は正教徒の生活を誕生から埋葬に至る全てを支えている。洗礼は新しい過ぎ越しを祝う神の民に参会する儀礼である。洗礼は問答形式をとる。啓蒙礼儀とよばれる悪魔祓いがあり聖堂の西に立つことがらはじまる。司祭は「サタナ及び其悉くの所業，その悉くの使い，その悉くの勤，其悉くの矜をすっつるか」と三度尋ねる。其の質問のたびに洗礼を受ける者は「すつ」と答える。悪魔祓いが終わると「ハリストスに配合するか」と司祭が三度質問する。問いには「配合する」と答え，ニケ

[36] 聖体礼儀は正教におけるもっとも重要な奉伸礼である。聖体機密のパンと葡萄酒はイイスス・ハリストスの体と血に変化する儀式である。聖体礼儀にはいくつかの種類がある。ほとんどの日曜日に行われている聖金口イオアンの聖体礼儀を式次第に基づいて例示する。

司祭高声……至聖三者の神を讃美
大連祷 ……「主，憐れめよ」繰り返し唱える
第一アンティフォン……通常は102聖詠を歌う
小連祷……大連祷の縮小形
第二アンティフォン
……ハリストスの籍身についての聖歌
小連祷……大連祷の縮小形
第三アンティフォン
……真福九端（マトフェイ5章）を歌う
小聖人…福音経よって主の公生涯の開始を象る
トロパリ……その日のテーマを歌う
聖三の歌……至聖三者への祷り
ポロキメン……聖詠の数節を歌う
使徒経……暦に従って指定された箇所を読む
アリルイヤ……神を讃美する歌
福音経……暦に従って指定された箇所を読む
重連祷
……「主，憐れめよ」を三回繰り返えす連祷
啓蒙者のための連祷
……洗礼を受ける前の人の為の祈り
信者のための連祷…洗礼を受けた人の為の祈り
大聖人……パンと葡萄酒を宝座に移す
増連祷 ……「主，賜えよ」と繰り返して祈る
信経 ……「信経」を歌う
機密の執行…パンと葡萄酒が聖神によって変化
生神女への讃美
……通常は「常に福い」という聖歌を歌う
増連祷 ……「主，賜えよ」と繰り返して祈る
天主経……「天にまします我等の父や，」と祈る
領聖……御聖体をいただく
感謝の祈り領聖したことを感謝する連祷や祝文
発放詞……司祭による最後の祝福

http://www.orthodoxjapan.jp から引用。このホームページから，あらまし日本正教会の諸特徴を見て取れる。

[37] 正教では一日は日没に始まり日没に終わる。教会暦で時課は昼夜法事すべてを指すが，狭義では第1時課，第3時課，第9時課をいう。広義の時課は晩課，晩堂課，夜半課，早課，第1時課，第3時課，第9時課を指す。一般の暦では日没が教会暦の晩課に対応し，第9時課は翌日の日没まで8に分けられる祈り。主として聖詠（詩篇）を読んだり，祈祷文(時課経という祈祷書を基本とする)を読む。各時課には記憶するテーマがある。たとえば晩課は天地創造，陥罪，ハリストスの受難における血潮と水の流出，アリマフェアのイオシフの記憶など。

[38] 聖歌の内容は8週間分8調ある。2週目に歌われるもの。高橋保行『知られていなかったキリスト教―正教の歴史と信仰―』83-84頁より引用。

ア・コンスタンティノープル信経を唱える[39]。洗礼を受けるとハリステアニンの洗礼名が与えられる。「幼児洗礼」も励行される。また危篤等のやむを得ざる場合は「摂行洗礼」も執り行われる。洗礼機密以外は正教会の信徒以外は受けられない。傅膏機密は洗礼を受けると直ちに行われる機密である。傅膏つまり油を塗る儀式で，「聖膏」と呼ばれる特別な油をつける。神・聖神の恵みが洗礼者に与えるために行う。痛悔機密は罪の許しを得るための機密で第二の洗礼ともいわれる。人はその弱さゆえに神から離れるが，その方向を神に再び向けさせる。したがって聖体礼儀において聖体を領聖する信徒はその前に司祭から痛悔機密を受けることが励行されている。神品機密とは「叙聖」とも呼ばれ，使徒の継承者とされる主教のみが聖体礼儀の中で行う。「主教」「司祭」「補祭」に任ずる儀礼である。主教が新しく叙聖される者の頭の上に手を置き執り行われる(按手礼)。婚配機密は結婚式のことを指す。神の恵みによって一つとなる。指輪の交換を中心にした「聘定式」と冠を被る「戴冠式」から構成される。指輪は神の力を意味する右手にはめられる。聖傅機密は病に冒されている信徒のために行われる機密である。油を塗り，癒しと罪の許しを祈る。死に直面している信徒のためには７人の祭司が交代で聖書を読み祈り，７回塗油する。司祭が一人でも執り行うことができる。機密において人の一生を通過する旅を祈る。機密の祈りばかりか，生活の隅積みまで祈りで埋められている。旅行のときも，新車を購入するときも司祭に祈りを願うこともある。すべては奉神礼に向けた準備の日として過ごす。

おわりに

正教は奉神礼に向けた生活の中に形と姿を徹底して求める。沢辺琢磨らは幕末と維新の狭間で煮えたぎる情熱を正教に賭けることができた。彼らは困乱のさなか失いかけた日本の文化としての美や形式，形(かた)，作法，所作などを正教の奉神礼のなかに見ていたのではないか。宮司であった琢磨にとって正教の奉神礼はその極致と映ったと思われる。正教を通していまだ見ていなかった世界，西欧文化へ開眼していったのではなかったか。琢磨らが洗礼を受け伝道者となって東北各地に散って行った時，彼らは正教の形と作法のなかに自ら生きる道を示されたのであろう。今日のわれわれにとって正教の用語や儀礼は非日常的に見えるが，琢磨らにとっても異文化であったに違いない。むしろその異質の只中に彼らの熱情を賭ける作法の神髄が存在したのであろう。正教の奉神礼のなかに見えざる奥義を確信したのではなかったか。

明治初期の正教の教勢は格段に拡大を続けていた。カトリックやプロテスタントに比較して宣教師や資金力において圧倒的に脆弱であったにもかかわらず，正教が拡大しえた理由はその時代の要請でもあった。正教の基盤は仙台藩を中心に東北地方にあった。貧しさのなかで下級武士や知識人は夢を育んだ時代であったのである。正教の機密は彼らに新鮮な礼儀と作法を注入できたのではなかった

[39] 東はハリストスが世の光として再臨される方向で，西は日が沈む方角になり死を予兆させる。高橋保行『知られていなかったキリスト教―正教の歴史と信仰―』101-102 頁を参照。この項の機密については同書によっている。

か。北海道における正教は函館をはじめその後道東，道央の都市部に展開する。開拓者たちの精神と正教は奉神礼を通し，まだ見ぬ土地の開拓の夢と正教の礼儀を重ねていたのではなかろうか。

謝辞：本稿の執筆にあたり，函館市企画部国際課倉田有桂主任，諸ハリスト教会の司祭や執事・信徒の方々にお世話になった。札幌ハリストス正教会のアレキセイ松平康博長祭司，函館ハリストス正教会のニコライ・ドミトリエフ司祭，釧路ハリストス正教会のミハエル対中秀行司祭，横浜ハリストス正教会のデミトリイ田中仁一司祭に大変ご厚意をいただき聞き取り調査にご協力いただいた。とくに札幌ハリストス正教会のアレキセイ松平康博長祭司には何度も時間をとっていただき稚拙な疑問にも丁寧な応対をいただいた。